
拾い人

紅ノ芽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

拾い人

【Nコード】

N6589T

【作者名】

紅ノ芽

【あらすじ】

ある男とある野宿人が一緒に生活をしていくお話。

男は24歳、野宿人は15歳。

その差9歳の二人の日常。

雨の中でこんにちは（前書き）

ふと思いついたので書いてみました。

最近書いてなかったので、これを機にまた書いていこうと思ってます。

つまらないかもしれませんが、よろしくお願いします。

雨の中でこんにちは

その日はいつもとおんなじ、ネオン街がピカピカとうるさい夜だった。

会社に入って2年目の僕は上司に連れられ、とあるキャバクラへ行った。

上司は妻子持ち、「今日は飲んで遅くなる」なんて喉まで出かかったうれしさを必死にこらえながら喋ってたっけ。

そんな彼のこと、店に入った途端に吹っ切れて、今まで計1時間ぐらいを狂ったように謳歌していた。

「ほら、次行くぞ！次！」腕を強引につかまれた僕は「はい、わかりました、行きましょ！」小さく息を吐いてから、それを気づかない様に大きな声でそう言った。

それから何軒か店をはしごして、解放された頃にはもう丑三つ時をさらりとまわっていた。

明日は仕事休みだしまあいいかと楽観的に考えながら帰路についていた時、僕は発見した。

公園のベンチで寝袋にくるまって寝ている人間を……。

こんな閑静な住宅街の一角に位置するこの公園で、いつも小学生の子どもたちがワイワイがやがや遊んでいるその公園で、野宿とは。

そこで眠っているやつもなかなかに変な奴だが、それをこんな距離からピクリとも動かずに見ている僕もきつと、他の人から見れば変な奴なんだろうな。

そして時間も時間だ、こんな時間帯にうろつく奴なんて、まあ頑張っている人を除くとそうロクな奴がない。

それに当てはまる僕はロクデナシなんだろうね。

色々と考えを廻らせていたら、本当の意味で自他共に認める変な奴になってしまふ、それは嫌だ、だから僕はとりあえず頭を元の方向に戻して家に帰った。

外灯に照らされている集合型郵便受けの前を通り過ぎ、錆びかけた階段を上がって一番奥の部屋へ入った。

アロハイツ21、それがこの名前。んで201号室が僕の部屋、6畳2間の意外と広いアパート。

鍵を靴を衣服さえ投げおいて、敷きっぱなしの布団へもぐりこんだ。

息苦しくなり目を覚ましたのはお昼を2分ばかりまわった頃だった。全身にびっしょりと汗が這っていた、別に悪い夢を見たわけではない、記憶がないから何とも言えないけど。

すぐ居心地の悪い布団から抜けだし、風呂場へ向かった。

さっと全身の汗を落とす程度のシャワーを浴びて着替えのパンツ一丁だけをはき、布団をベランダに干しにかかった。

手すりに布団をかけ大型洗濯ばさみを2つそいつにかけてやった、ふと正面に顔を向けると空はいい天気で雲もほとんどないぐらいだった。

「これじゃ、暑いわけだよ。」6月といえどここは最高気温37にもなったことがある地域、そろそろ夏の兆しが見え始めるころだし、当然といえば当然か。

使ってる布団も冬用だし、しょうがない。

201号室は風通しが非常にいい、冬場は大変だが夏は過ごしやすくて重宝している。

玄関の窓とリビングの窓を全開にすると、外には出たくないほどのいい風が入ってくる、そのせいで去年の夏は腹を壊したのだけど。

シャワー上がりもあってか自分的に火照ってはいるが一応のこともあり、下だけははいておくことにした。

テレビをつけると、丁度良くいつものバラエティー番組が始まる瞬間だった。

色んなことをやっているバカバカしい番組で結構人気があるらしい、今日は夏場でのソフトクリームをきれいに食べるにはと言うものだった。

「・・・はははは」テレビからの笑い声を聞きながら僕は台所に立っていた。

昨日作っておいたチャーハンをレンジで温めながら、冷蔵庫から麦茶を取り出し氷と共にコップに注いだ。

ピーピーピーと麦茶をしまったと同時にレンジがなった。

ふと感じたがレンジでチンしてという言葉はなんだか古いように思える、今ならレンジでピーしてってところか、それはそれは卑猥に聞こえるかもしれない。

アツアツになったラップを取りスプーンを添えて麦茶と共にテーブルへ運んだ。

食事を片づけてリビングの床に寝ころがった、テレビの音と外からの音が心地よい、何もせずにくーたらしてるのも悪くないね。

暗い世界で数分過ぎし体を起こすと、番組と番組の間にある天気予報が始まるところだった。

それによると今日の3時からこの地方では雨が降るらしい、降水確率も70%と高め、昔は天気予報なんてあてにできなかったが、今はかなり精度が上がっているので大いに期待している。

予報が終わるとすぐさま立ち上がり布団と取り込むと適当に上着を羽織り、雨が降る前に食材を買いに出かけた。

ビニール傘を片手にひっさげて、淡々と歩いていく。

近くにある激安スーパーまでは5分程度の道のり、色んな行き方があるが今日は急ぎ、いつもの道を通っていくことにした。

家を出て道なりに進んでいくと昨日の公園に差し掛かった。

ふとあれのことが気になり公園を覗き込む、だがもうそこに姿はなかった、一瞬ほっとしたけどなんだか一抹の不安も現れた。

とりあえず警察のお世話になっていないことを心で祈りながら僕はスーパーへと道を急いだ。

雨の中でこんにちは（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次はいつ更新するか決まっていますませんが、また見に来ていただくとうれしいです。

2 話目

スーパーについてからは早かった、なんたって雨に当たりたくなかったから。

安いものばかり買い物かごに突っ込んでいく、タイムセールではいまだに負けなし、近所のおばさん軍団からライバルと思われるらしく僕に会うと「あら、あんた」なんて言っただけで気軽に話しかけてくれるし、お得情報も教えてくれる、かなりいい人たちだ。

今日のタイムセールは痛みやすい魚系、もちろん逃してはいけない。店員が店の奥に入るや否や、私はそんなの興味ないわよってな顔しながら店員が入って行った入り口付近をうろろ歩き回っている。とりあえず僕は、店員が出てくるまで飲み物やお菓子を2つ目の籠にどさつと入れすぐにさっきの場所へ戻って行った。

すると先ほどまでなかったおばちゃんの群れがあので入り口を取り囲むように壁を作っていた、僕は先頭から5人ほど後ろ、これでもタイムセールでは命取りになる。

お一人様1点ものであれば何とかなるかもしれないが、お一人様3点とかになるともうこの場所では諦めるしかないだろう。

つまりタイムセールに男も女もおばちゃんも関係ない、無差別格闘技となんら変わらない恐ろしいものなのだ……。

まず籠を安全な場所に置きそれからちよつと頑張つて、人だかりの中へ中へと体を食い込ませていく、僕に分け入られるおばちゃんたちはむすつとした顔を露骨に隠そうともせずこちらに向ける。

そんなのもう慣れっこである、仲のいいおばちゃん軍団の人だとすんなりと入れてくれたりする、そのときはそのおばちゃんの方まで頑張らないといけないけれど。

なんとか2人ほど抜きたい感じのポジションをゲットした、ふうと一息ついた瞬間入り口が開き、店員と肉やなんやらを乗せるトレイが一緒に出てきた。

乗っているのは鯖、2匹ずつまるまんまラップに包まれている、この量からするとお一人様2点つてところだろうか。

そうこうしている内に店員が拡声器を取り出しこう言った「今日のタイムセール商品は鯖！お一人様2点限り！お子さんは人数に入れても構いません！お値段は1パック300円切って298（ニツキユツパ）！・・・それではどうぞ！」

瞬間、どつと後ろからものすごい力で押されるが前にも人がいる、倒れることはないが寄りかかる様な体制になる。

前からと後ろからの強烈な肉圧で身動きが取れなくなるほどだったが、なんとか隙を突き抜け出すと、必死に手を伸ばして鯖を2パック手に入れる、そして今度は戻るために必死になった。

勝ち取った鯖を籠に入れると逃げるようにレジへ向かった、みんなあつちに気を取られておりレジに行くのには苦勞しなかった。

いつものレジに籠を乗せるといつもの店員さんが「今日もタイムセールで勝ったんですね。お疲れ様です」とにっこり笑顔で迎えてくれた、バイトの娘なのだが彼女が入った時からなぜかほとんど彼女のレジでしか会計していない気がする、故意ではない偶然です。

彼女とのほんわかタイムを終わらせもらったレジ袋にいろいろ詰め込んでいく、今日の買物はいつてもより大量、おかげで袋いっぱい4つ、両手に2つずつ抱えて店を出た。

外に出た途端に鼻の頭をかすめる一滴の雫、それがどんどん増えてきて僕がスーパーから100m離れるころにはもう、あたり一面ザーという音に囲まれていた。

傘を持ちながら袋を4つ持つというのはかなりハードだ、数歩で腕が疲れてきて首に傘をかけるような状態になる。

それで斜度のきつい坂を上らなければいけない、今日はまだ風がなただけいい方、これで風があると傘がどっかにもっていかれる。

ゆったりとした足取りで坂を上りきると左にあの公園が見えてくる、のっそのっそ歩きながら公園の前を通り過ぎようとした時、また発

見してしまった。

ベンチの下に隠れるようにある派手な色の寝袋が……。

昨日は夜だったからよく見えなかったけど、あんなに派手だったとわ。

そして今日はそれがもそもそ動いていた、あまりに衝撃的な光景にとつとつ僕の好奇心がうずいてしまった。

坂を上がってきたままの足取りでそれに近づいていく、湿った砂利の音が足元から公園に響く、雨音なんて無視するように。

近づくとび鳴る足音に反応するようびくびくと動く寝袋、とつとつ目の前まで来てしまったわけだけど、ここにきてチキンハートが唸りを上げ好奇心に待ったをかけた。

これでひげを生やしたおっさんがポンと出てきたらもう……、でもやっぱり気になったので呼びかけてみることにした、いきなり触ることはチキンの僕には無理です。

「あー……」いつもより少し小さい声で呼びかけるも返事がない、もしかしたら雨の音で聞こえないのかも、そう思っていていつも調子で呼びかけることにした。

「あー」数秒待ったが返事が返ってこない、仕方ないので腹から声出してみることにした、誰かに見られてたら変な奴だと思われるけど。

「あー、ベンチの下の人ー！聞こえますかー！」数秒沈黙が流れた後、観念したようでもぞもぞ動きこちらに転がってきた。

シャリシャリと寝袋が鳴る、目の前に出てきたそれはファスナーが一番上まできつちり締められていた。

少しおいて、中からファスナーを開けようとしているのかファスナーライン付近がちょこんと盛り上がる、ゴソゴソ動く、そして急に動きが止まった、きつと見つけたのだろう。

またまた少しだけ間をおいてようやくファスナーが頭の方から足の方へ進んだ、途中で生地が噛んで焦ってたけど。

派手なびちゃびちゃの繭わつくろから出てきた蝶ひとは、長くきれいな漆黑に少し藍色が混じった髪をもち、すべすべとしそうな絹肌をさらした制服姿の女の子だった。
上体だけを寝袋からだしこちらを見ている、意外すぎるということもあったが何より澄んだ赤みの強い瞳の色に引き付けられ動けなくなっていた。

大きな刹那、まったく動かない僕を見て首をかしげながら寝袋に戻ろうとした少女、そこではっと気が付いて彼女にこう言った「そこじゃ風邪ひかない？」すると「大丈夫、だって屋根あるもの」ベンチを指さしてそう答えた。

「でも、君の寝袋、べっちゃべちゃだけど・・・」というと「大丈夫、だって中までは濡れないもの。防水」真顔でグッドサインをだす少女、お茶目なところもあるようだ。

こんなに拒否られたのになぜか諦める気になれないのは、僕が変な人だから？

これで駄目ならと、たかをくくって最後の質問を試みた「ごはんとかってどうしてるの？」すると「大丈夫、毎日採ってるから。色んな所にあるんよ」もう一度グッドサインをこちらに向けてきた。どうやらこの娘はほおっておくしかないようだ、仕方なく立ち上がり「そっか、それじゃまたね。警察には気を付けるんだよ」そう言っつて僕は彼女に手を振ると、彼女もまた肩の高さにあつた手をふりふりしてしてくれた。

それからお互い自分の家に帰って行った、彼女はベンチの下に、僕は風通しのいい201号室に。

3 話 目

雨に濡れた階段をコツコツ上っていく、ようやく部屋の前まで来ると片手の荷物を床に下ろし、鍵を開けた。

傘を閉じて中に入るとちよっとしたカビの様な匂いが鼻孔をつつく、でもそれはもう慣れきった匂い、不快でもなければ心地良いわけでもない。

とりあえず、冷蔵庫に先ほど買ってきた今日の戦利品を詰め込むと、僕は雨でぬれた体を温めるべく風呂に入ることにした。

ちやぶ、ちやぶ、ちやぼん、足から浴槽に入ってしまった、きちんと肩まで湯に入るとふうと一息つき天井を仰いだ。

何も無い天井に唯一あるのが通気口、本当は浴室全面白いはずなのに電気のせいか若干橙がかつている、そんな天井から水滴が一滴落ちてくる、僕の額に当たって壊れて消えた。

「っ！冷たあ」ぎゅつと目を瞑った僕は、両手を器にして湯を集め顔にかけて、バシャ！「ふー。さて、上がるかな」体も頭も洗浄済み、ゆつくり体を湯船から出すともう一度軽くシャワーを浴びた。

風呂場からリビングに出ると外は大雨、窓に叩き付ける雨音がバチバチと鳴っていた、頭を拭きながら公園にいた寝袋少女を思い出す、「・・・防水とはいえ、この雨は辛そうだ。でも、たぶん、いやきつと大丈夫だろう」僕が心配したところで取り越し苦労かもしれない。

僕は湿ったバスタオルを洗濯籠にいれると、晩御飯の準備を始めた。今日のおかずはさつき買ってきたものにこの前作り置きしておいた特製の辛みそ、それとあとなんかお腹が満たされそうなものをちよるちよると取り出すと適当な料理に仕上げリビングのテーブルに持

っていった。

いつもは料理を作っている最中もつけているテレビは今日だけつける気にならず、電源を消しっぱなしだった、そのためか先ほどより強く雨音を感じ窓の外を眺める、でも室内からでは詳しくをうかがえない。

出来立ての料理をテーブルに置いたまま僕は玄関に向かった、ドアを開ける、少し隙間が空いただけで聞こえてくる轟音、全開にする
と雨はあの時より治まっていたが、道路を流れる水の量は半端ではなかった。

一瞬思い浮かぶあの少女、公園と言えどあそこらへんは少し窪地になっっている、こんな雨の日は水はけのよいあの砂場でえ水に浸る、数秒間行動を停止し頭を働かせると、僕は上着を着て傘を持っていた。

部屋を出て鍵をきちんとかけ階段を少し急ぎ目に降りていく、最後の段で足を滑らしたがなんとか体全体で手すりにつかまり難を逃れた、小走りで公園に向かう、びちゃびちゃとかかたが雨水を持ち上げてジーンパンの裾にシミを作っていく。

目的地に着くとベンチの下にあの子の姿はなかった、「・・・よかった」やっぱり骨折り損かあ、そう思った瞬間に後ろから声をかけられた、「あれ？あなたはさっきの人、どうしたの？」こっちの気も知らないのほほんとした声だった。

振り向くと寝袋少女が頭の上にビニール袋を乗つけて立っていたのだ、もちろん寝袋は常時装備している、「・・・？、なんかわたしの顔についてますか？」両手で顔を触りながらこちらに言葉を投げかける。

「いや、別に。ここは窪地でさ、雨も強いし大丈夫かなって思っ
ね」未だに顔をさわさわしてる少女を見て言葉を返す、「はい。わたしは問題ありませんよ」。でも、寝袋が水でしみちゃって・・・、せっかく寝てたのに気が付いたらべっっちゃべちゃで」笑いながら

寝袋を絞るとジャバつと水がしみ出すほどだった。

「うわ、ひどいね。ほかに雨宿りができるところないの？」と聞く
と、「ありますよ」。でも、ちょっと遠いんです、だから行くにも
行けなくて」苦笑いの彼女、この時僕は言うべきか言わないべき
か迷っていた、臆病だからこんな簡単なことも言えずに尻込みして
る、『雨の間だけでも僕の家にくるといいよ』って。

少女の言葉から数秒間あたりには雨の音だけが響くことになった、
それから口を開いたのは彼女だった、「それじゃあ、わたしはもう
行きますね」そう言いながら彼女はぴょんぴょんと飛び跳ねなが
ら移動しだした、「え！？どこいくの？」とつさというには少し遅
かったが僕は聞いた、「え、そこですよ？」数回地面を蹴ったかと
思えば今度はベンチの上に寝そべりビニールを屋根のようにベンチ
にかけた。

自分で納得のいく即席テントができたのが満足そうにうんうん頷く
と、「それじゃあ、おやすみなさい」また肩の高さにあった手をふ
りふりしてテントに潜ろうとした。

でも、僕はその腕をつかんで少し少女を引っ張ると「あ、あの！」
ずっと頭の中にあつた言葉を言おうとしたがある一言によってそれ
はまた頭の深くまで沈んで行くことになる、「い、いや。やめて！」
今まで聞いたことがない声が僕の耳を切り裂いた。

「あ……、いや、別になにかしようとか思ってたわけじゃなくてさ。
……、ごめん」僕はもう一本の傘を彼女の近くに立て掛ける
と走ってその場を飛び出した。

人のためになろうと思って家を出てきたのに、最終的に目的のこと
も言えず変な行動をとり自爆しただけになってしまった、そんな自
分があまりに情けなくて恥ずかしくて夢中で家に戻ったのだった。
何かに追われるように階段を上ると震える指で鍵を差しドアを開け
部屋に入った、息があがって自分の呼吸音だけが玄関に反射する、
茫然と立ち尽くして床をみる、気が付けば差していた傘が消えてい

た。

「……はあ、……はあ、……はあ、……傘……」

「どこかに忘れてきた傘と彼女のところに置いてきた傘を思い出す、ゆっくりドアに背を付けながら尻を落としていく。

地面に着くと体の暑さをなだめてくれそうな程の冷たさ、眼を瞑り下を向く、鼓動を聞きながら僕がやった間違いを思い出す、「言えよ、それぐらい。言えるだろ……それぐらい。下心だつてなかったじゃ……いや、少しはあったか。だめだ、うまくいかないなあ」そのまま気のない笑いをもらして大きなため息をついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6589t/>

拾い人

2011年10月8日13時42分発行